

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 萊 む し の 会
第11号 2025.2.10

大原のオオムラサキにたどり着くまで

的場 亮一

小学校 2～3 年生の頃、私はハチとアブの採集に夢中になっていた。ハチは刺されると痛いし、アブは血を吸われるとかゆくなるなど、子供の間では避けられていたので、ならば捕まえてみようという、ひねくれた動機だったと記憶している。

当時、父の勤めていた会社は、地元の医療機関に医療器具や試薬を販売し、また小中高や研究機関に必要な実験器具や理科の教材などを販売していた。

というわけで、父を通じて捕虫網、展翅板、昆虫針、毒ビン、ピンセット、などなど手に入った。買ったものもあるが、試供品なども多々あったようだ。展翅板には中央の溝を広げられる可変式のものもあった。特に指導者がいたわけでもなく、我流で展翅し、脚も格好よく広げては悦に入っていた気がする。

父の上司が植物採集と植物標本づくりに凝っていて、その息子と孫息子がやはり植物標本作りが好きで、私と同じ学年ということもあり、よく植物採集のお供に連れて行ってもらった。私は捕虫網、彼らは胴乱とスコップをもってでかけたものだった。今なら車で 30 分程度の近郊の丘陵地や湿地帯だが、当時はマイカーもなく、田舎の路線バスにのり片道 2 時間近くかけていくため、毎回お弁当持参の一日がかりだった。



図1 中央が小3の私
1956年 夏



図2 捕虫網をもつ私
1956年 夏



図3 捕獲した蝶を手に記念撮影
1956年 夏

私の標本箱は高価なドイツ箱などではなく、たしか桐箱だったような気がする。4年生ごろまでには、かなりの種類のハチとアブの標本ができ、秋の始業式には夏休みの宿題として学校に持って行ったものだった。田舎では冬休みが長い分夏休みは短くて、いつも 8 月 25 日ごろに 2 学期が始まる。そのころには採集したハチやアブの種類も増え、それぞれ 80、30 くらいだった気がする。

当時は、正確な同定とは程遠く、主に保育社の「原色日本昆虫図鑑 下」(図 4) に頼っていて、調べていた。そこでわからない場合は、市立図書館にいき、厚さ 10 cm 余りの重くて分

厚い図鑑で調べたが、それはカラーではなくて、いまひとつはっきりしなかったと記憶している。

そんな昆虫採集に明け暮れていた4年生の夏休み明けに、ちょっとした出来事があり、昭和32年9月4日発行読売新聞の山形版にその記事が載った(図5)。

その年は、夏休みの自由研究としていろんな液体の比重も調べていた。水道水、醤油、酢、てんぷら油、灯油などは自宅で調べられたが、先送りにしていた海水の比重を調べるため、家から歩いて5〜6分ほどの



図4 バイブルだった図鑑



図5 1957/9/4 読売新聞山形版 学名が「ヒッパ」ということも初めて知った

砂浜の海岸に行き、海水をバケツに汲んでは、何度か測定していた。今でも覚えているが、その時は風でほとんど波もなかったのも、砂浜の波打ち際ですこし深くなる傾斜部分で、ハマグリやアサリはないかと、網で砂ごとすくいバケツに入れては探していたところ、見たこともないおもしろい生き物がみつかった。大きさはゲンゴロウよりやや小さい程度で、色は透明にちかい淡いグレー、もちろんゲンゴロウではない。裏をみるとカニの卵のように、ピンク色の卵をはらんでいた。

2匹つかまえたので、翌日学校に持って行った。実は担任の後藤悦造先生はとても理科が大好きな先生で、頼りになるのできつと調べてくれると思い、大事に海水に入れたまま持って行った。後藤先生にもわからずで、杉原千代太校長先生に持っていった。

その後、杉原校長先生がいろいろと調べてくれたようで、私は数日後に校長室に呼ばれた。当時校長室は保健室の隣にあり、保健室は何度も入ったが校長室は初めてで、緊張して入った。校長先生は「的場君、これはスナホリガニと言って、とてもめずらしく、これまで日本海側では富山県あたりまでしか見つかっていない。卵も持っていることから、庄内浜にも住ん

でいることは間違いない。北限が庄内までのびている、貴重な発見だよ」と、少し興奮しながら話してくれた。しかも新聞記者を呼んでいて、インタビューを受けた。緊張しながら質問に答えたことを覚えている。

その内容が記事になった。その日の新聞を保管していて、今見たら色も黄ばんでかなり傷んでいるが、読めるのでスキャンし貼り付けることにした。記事はおおむね正しかったが、一つだけ違っていた。私の標本の種類の数はハチが 80 くらい、アブが 30 余りと、言ったはずだが記事ではハチとアブの合計が 80 くらいとなっていた。まあ、大した違いはない。そんなことで、4 年生の頃はまだハチの採集に夢中だった。

5 年生の時、工作の時間にゴム動力の飛行機を作る授業があり、教材の「東京」(機種名)という飛行機を作った。まもなく、グランドで 5 年生と 6 年生による飛行機大会がおこなわれた。そこでなんと私の飛行機の滞空時間が最長で 6 年生をも差し置いて、優勝してしまった。

以来、飛行機博士のあだ名がついた。6 年生になったとき、あだ名に恥じぬようにと真剣に強度を保ちつつも軽量化を図りながら「SONY」(機種名)つくった。その年の秋に酒田市の全小中学生を対象にした、酒田市模型飛行機大会が最上川河川敷で催された。そしてなんと私の SONY が運よく上昇気流に乗りどんどん舞い上がり、ついには機体が見えなくなった。動力源のゴムはすでに完全にたわみ、プロペラも空転しているだけだが、上昇気流に乗ったのだった。直線的に飛んでいくとすぐに見失うので、大きく旋回するようにわずかに尾翼に細工していたのが功を奏したのだが、それでも上昇しすぎた。記録は見えなくなるまでの時間が 3 分数十秒で、結局小学生の部で優勝してしまった。リボンに名前の書かれた小さな優勝カップをもらった。しかしその機体は結局行方不明となり、残念ながら戻らなかった。

6 年生から中学生にかけては、どういうわけかすっかり昆虫採集の熱がさめてしまい、代わりに甘ったるい恋愛小説や、女生徒に関心が移っていった。まもなく受験勉強などがいそがしくなり、高校生になっても昆虫からはすっかり遠ざかってしまった。この傾向は大学時代もつづき、クラブ活動のフォークダンスやスクウェアダンスに忙しかった。しかし決して F D や S D に熱心ともいえなかった。3 年生の時だった。すでに 10 年近く前に亡くなられた三笠の宮様が全国 F D 協会の名誉総裁で、東京大田区の体育館で全国大会が開催されたときに来られていて一緒に踊った。といっても三笠の宮様と順番に手を握れるのは女子だけで、男子は入れ替わるいろんな女子とだけ。そんなことよりも、2 日目には K 子さんを誘って内緒で会場をぬけだし、銀座並木通りから日比谷公園周辺をつかの間の銀ブラデート。

そして卒業し企業人になったら、職種上必要な学ぶべきことが多すぎて、初めて必死に勉強することになった。その後は退職直前の年まで、昆虫のことはほとんど頭から消えていた。

ア情報 300 号&40 周年記念号 (P62) にも記したが、2009 年に水生植物公園「水の森」でフジバカマに訪花していた標識付きのアサギマダラに出会い、それがきっかけで、BV アサギマダラの会に入会し、いろんな方々と知り合った。さらに「大原のオオムラサキを守る会」を知り、入会させていただいた。いずれの会員もみなさん昆虫にくわしくて、一緒に活動していると、昆虫、特に蝶の生態に関するいろんなことを教えてもらえて、毎回学ぶことが多い。

特に、大原のオオムラサキ保護活動では、年間を通じていろんな活動があり、おかげでオオムラサキの興味深い1年間の生態も直に観察し体験できる、素晴らしい機会の連続で、すっかり気に入っている。

一つ問題なのは、小さな脳が飽和したのか、いつの間に記憶力が弱くなり、覚えてもすぐに忘れてしまう。ルートセンサスでは、特に外見が似たナツアカネとアキアカネの区別方法を毎回頭に刷り込むのだが、一週間もすぎるとどっちがどっちだったか、わからなくなってしまう。蝶に詳しい人たちにいろんな蝶のそれぞれの食草も教わり、実際にその植物を見たりするのだが、次回見たときには忘れてしまい思い出せないことも多い。

まあ、これも老化と言おうか、脳の経年変化と理解し、自分のことながら大目に見ていくことにしている。

オオムラサキ野外越冬幼虫調査で発見された昆虫

藤野 適宏

2024年11月29日、京都大原学院7～9年生が恒例のオオムラサキ野外越冬幼虫調査を行いました(図1)。生徒の皆さんの頑張りで、めでたく今年も4頭の発見がありました(図2)。その他にも落ち葉の下で越冬中のいくつかの昆虫の発見がありましたので、紹介します。

1. アシブトコバチの仲間(図3)

約5mm。寄生バチの仲間。オオムラサキの蛹にも寄生します。冬の季節をどのようにして過ごしているのか、疑問に思っていましたので、新たな発見でした。

2. ヒメカメノコテントウ(図4)

約4mm。エサであるアブラムシのいない季節を、こんなところで過ごしていました。ピンボケですみません。

3. チャバネアオカメムシ(図5)

約11mm。林の中に住んでいて、よく見られるカメムシです。光沢のある緑色と周囲の茶色が特徴です。

4. エサキモンキツノカメムシ(図6)

約12mm。落ち葉をめくると割合よく見つけられます。胸のハートマークがチャームポイントです。



図1 野外越冬幼虫調査風景



図2 発見したオオムラサキ幼虫



図3 アシブトコバチの仲間



図4 ヒメカメノコテントウ



図5 チャバネアオカメムシ

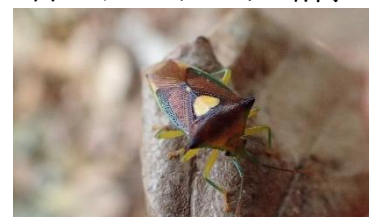


図6 エサキモンキツノカメムシ

守っていききたい大原の希少な昆虫

大原のオオムラサキを守る会

自然が豊かな大原には希少な昆虫が多くいます。ここではレッドリストに記載されている昆虫を紹介します。レッドリストとは、環境省や都道府県が指定した絶滅の恐れのある野生生物のリストです。

アオハダトンボ：準絶滅危惧（環境省）

高野川のヨシ原にいます。ハグロトンボと似ていますが、オスは羽に金属光沢があり、メスは羽の



2009. 6. 27

先の方に白い斑紋があります(写真)。5月中旬～7月下旬、6月に多い。体長 55～62mm。

ムカシヤンマ：準絶滅危惧種（京都府）

動きはゆっくりで、日当たりのよい場所によく止まります。谷沿いの道を歩いていると発見でき



2014. 6. 17

ます。胸にハートマークがあるのが目印です。4月下旬～7月頃。体長 63～72mm。

ミヤマアカネ：準絶滅危惧種（京都府）

水田や里山の小さな流れのある場所にいます。飛び方はゆっくり、すぐに止まります。美しいアカトンボ

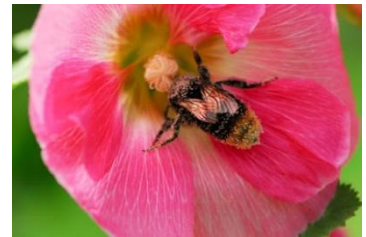


2014. 9. 16

です。羽の模様の特徴があるので見分けやすい。6月下旬～。体長 32～39mm。

クロマルハナバチ：絶滅危惧種（京都府）

黒く短い毛におおわれ、ビロード状。いろいろな花の蜜を吸いにやってきます。数はとても少ない。



2010. 7. 5 高島市朽木

4月下旬～11月初旬。体長 12～23mm。

トラマルハナバチ：準絶滅危惧種（京都府）

オレンジ色の毛が目立つ大きなハナバチです。いろいろな花の蜜を吸いにやってきます。4月下旬～11月上旬。体長 10～26mm。



2013. 10. 4 大津市栗原

キマダラルリツバメ：準絶滅危惧種

(京都府)

尾が2対4本ある日本唯一の種です。幼虫はサクラの古木にいるアリと共生しているために、その



2023. 6. 28

近くに咲くヒメジョオンで蜜を吸っているのを見かけます。6月中旬～下旬。前翅長 15～18mm。

オオムラサキ：準絶滅危惧種（京都府）

大原で保護活動をしているチョウです。国蝶。大きくて美しく里山を象徴するこのチョウが増え



2024. 7. 3

ていくことを願っています。6月下旬～8月上旬。前翅長 45～60mm。

ハンミョウ：絶滅危惧種（京都府）

日当たりのよい山道を歩いていると、先へ先へと飛ぶので、ミチオシエとよばれる美しい甲虫で



2022. 5. 7 大津市栗原

す。大きな牙を持っていて、昆虫などを捕らえます。春～秋。体長 18～20mm。

その他の注目すべき昆虫

ムスジイトトンボ

流れの穏やかな河川に住んでいます。草生川で見つかりました。5月中旬～10月上旬。体長 30～38mm。



2005. 6. 11

オオイシアブ

無骨な印象のムシヒキアブの仲間。森林に住んでいます。5月～7月。体長 15～26mm。



2007. 5. 26

ケラ

地中に住んでいます。畑に普通にいますが、数が減ってきました。4月～9月。体長約 30mm。



2006. 4. 30

アオメアブ

生きているとき、眼は青緑色に輝いています。大型のムシヒキアブの仲間。6月～8月。体長 20～29mm。



2006. 7. 9

カマキリ

チョウセンカマキリとも言います。オオカマキリによく似ています。8月～11月。体長 70～82mm。



2008. 10. 4 大津市清風町

ゲンジボタル

日本最大のホタル。高野川に住んでいますが、水質悪化で減少がとて心配です。5月～7月。体長 10～16mm。



2007. 5. 26

(文責：藤野)

網室内オオムラサキ越冬幼虫一斉捜査の結果報告

大原のオオムラサキを守る会

今年度の一斉捜査は2024年12月4日に、会員の手で行った。昨年までの過去2年間は大原学院児童が参加してくれたが、今年度は参加できずに残念だった。今年度も昨年に引き続き多くの越冬幼虫がいて、この日は6本のエノキの周りを囲った畔シートの外にまで這い出た幼虫の捜査に終始して終えた。発見数2,960頭であった。

その後3回の捜査を行ってようやく終わることができた。各調査日ごとの発見数は、12月11日3,996頭、12月18日5,450頭、1月15日5,891頭であった。それとは別に牧野先生が子どもたちと探し出して、小出石町に放した幼虫が215頭いるので、一斉捜査で発見した幼虫数は18,512頭となった(右表)。加えて、一斉捜査前に持ち出して網室周辺の数本のエノキ下に放した幼虫が700頭いたので、網室内で発見した総数は19,212頭となる。この数は昨年度の20,785頭と遜色がない大変な数だと思う。900頭を網室内に残すが、ほとんどを野外エノキに放す予定である。(文責：藤野適宏)

樹木別	12月4日	12月11日	12月18日	12月24日	1月15日	計
北東	700	1,700	810			3,210
北中	700	300	1,487	215	1,136	3,838
北西	966	751	1,400		1,608	4,725
南東	80	470	1,080		1,376	3,006
南中	220	315	491		27	1,053
南西	294	460	182		1,744	2,680
計	2,960	3,996	5,450	215	5,891	18,512

<1月おもな活動の報告>

◆1月15日(水) 10:00～、13:30～、14:30～ (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、的場、塩尻、大友、村上、奥谷、計8名
(午前) 網室

- ・会議 ①本日の活動内容；午前、午後、その後
 - ②これからの活動について；特別展に向けての準備をする
 - ③報告・学院の生徒が野外のエノキに幼虫を放した
 - ・ルートセンサスの結果を蝶類保全協会に入力
 - BVルートセンサスの結果も入力予定
 - ④連絡・里トラへの報告；1月で報告するので資料の提出を
- ・網室内越冬幼虫一斉捜査一本日の発見越冬幼虫数 5,891頭
(13:30～) 大原文化C
- ・会議 「活動20周年記念展示」についての事前打ち合わせ
 - *打ち合わせ結果、資料、については藤野さんから別途報告あり
- (14:30～) ドングリ園 参加者；小松、藤野、村上
- ・会議；ドングリ園の伐採について里トラ山下さんと会議

◆1月22日(水) 10:00～、13:30～ (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、的場、大友、村上、奥谷、計7名
(午前) 網室

- ・会議：本日の活動内容一午前、午後

- ・網室内越冬幼虫管理；各エノキの畔シート内に 150 頭の越冬幼虫を入れる
 - ・網室内エノキの剪定
 - ・網室天井ビニールシート開き
- (午後) 大原文化C
- ・特別展の準備

◆1月29日(水) 10:00～、13:30～ (報告者：奥谷)

○参加者 藤野、木村、的場、塩尻、大友、村上、奥谷、計7名

(午前・午後) 大原 BC

- ・会議 ①記念展示について
 - ・どのように展示するか；標本目録、守っていききたい大原の希少昆虫、トンボの展示、蝶の展示
 - ・展示スペース；どこにどのように展示するか
 - ・ポスター；主催者、共催者を記入、キャッチコピーを入れる
 - ・展示物；着ぐるみ、大型模型等工夫する
- ②ワイン会社からの寄付金について
- ③本日の活動内容
- ・記念展示の準備
 - I・II担当；オオムラサキとアサギマダラの展示物の取捨選択
 - III担当；標本整理

【あとがき】

網室内一斉捜査の結果で報告したように、今年度の発見幼虫数は 19,612 頭でした。一方で親の世代の羽化数は 934 頭でした。このうち半数がメスとすると 467 頭、このすべてが産卵すると仮定して、1 メス当たりの産卵数は $19612/467=42.0$ 個になります。これだけでもすごいと思うのですが、網室内では産卵前に死亡するメスの数はかなり多いことを経験的に知っているし、越冬幼虫になるまでに死んでしまう個体も少なくありません。そのように考えると、1 メスが産むことができる卵の数はいかばかりかと思います。(藤野)

＝ 目 次 ＝

大原のオオムラサキにたどり着くまで	1
オオムラサキ野外越冬幼虫調査で発見された昆虫	4
守っていききたい大原の希少な昆虫	5
網室内オオムラサキ越冬幼虫一斉捜査の結果報告	7
1 月おもな活動の報告	7
あとがき・目次	8

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会

2025 年 2 月 10 日

第 11 号

大原のオオムラサキを守る会 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町 54 小松清弘

蓬莱むしの会 〒520-0105 大津市下坂本 1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原 21-151 藤野適宏